ガンかて笑って死ねるんや

フィルムに残した中村正堯博士の記録

中村歌子著

Kouta BOOKS

ガンかて笑って死ねるんや

定価　250 円

昭和40年10月10日　第1刷発行
著　　者　中村歌子
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3の19
電話　東京　(942)1111(大代表)
振替　東京　3930
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　若林製本

© Utako Nakamura
Printed in Japan
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

ガンかて笑って死ねるんや

フィルムに残した中村正堯博士の記録

中村歌子著

まえがき

「笑って死んでいくことかて、できるんや。その姿を自分の身で示して、ガンの苦痛にあえいでいる大勢の人たちを勇気づけ、励ましたい」五十二年における最後の望みをとげて、夫、中村正堯が世を去ってから、四カ月を迎えようとしています。

国立大阪病院の耳鼻いんこう科医長であった夫、そして夫が胃ガンと戦った五十余日の生活を写した二千余枚の記録写真……当時、新聞やテレビ、週刊誌が大きく取り上げてくださり、またその後各地で写真展を開いてくださるなど、みなさまから多大の関心が寄せられました。

病床に伏すわたしや、記録写真を撮ってくださった大阪在住の写真家、岩宮武二さんのもとに、あるいは取り上げてくださった新聞社や放送局、雑誌社宛に、あとに残ったわたしたち母子に対する激励のお便りや夫への共感のおことばがたくさん寄せられたのを見て、夫の行為がむだではなかったと、心から感じ入ったのでした。

しかし、ガンと戦った夫の記録写真が世に知られるにつれて、わたしの胸に気がかりなこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

が残りました。それは、世間のかたがたのあいだに、夫が非凡な人物であったかのような印象を強めてしまったのではないか、ということです。事実、えらい人やと、おほめのおことばもたくさんいただきました。そんな印象を残したことは、わたしには残念でなりません。

松山の一士族の家に生まれ、大阪高等医専（現大阪医大）出身の夫は、平凡な医師であり、家では子供に甘い父、そしてわたしにはやさしい夫、大学の研究室では、先生の手を焼かせた月並みの研究生だったのです。世間でいわれるような、えらい人ではありませんでした。

「平凡な人間なら、だれでもできることをしたまでや。ガンなんて、人間が恐れるほどのものとちがうぜ」――夫は、きっといいたかったにちがいありません。わたしはそのことこそみなさまに知っていただきたいのです。さいわい、講談社からわたしの手記を出版したい、とのお申し出がありましたので、この機会に、かねがね気になっていたこの誤解を解くことができれば、と病床であえてペンをとりました。

ペンをとってはみたものの、なかなか思いどおりに進みません。幾度か、投げ出そうかと思いました。いまどうにかやりとげることができたのは、全国のみなさまのお寄せくださった励ましのおことばに力を得たからにほかなりません。このつたない手記が、ガンに悩み苦しんで

いらっしゃるかたひとりにでも、励ましの力となることができれば、こんなうれしいことはありません。

最後に、忙しい時間をさいて、夫の記録写真を撮ってくださった岩宮武二、井上青竜、小畑正紀の三氏、病床の夫を勇気づけ、そしてこんどは、やはり病の床にあるわたしを慰め励ましてくださった澤瀉久敬先生（阪大教授）はじめ全国のみなさまに、心からお礼申し上げます。

また、この本のために、ご寄稿くださった中村の恩師久保先生、畏友の澤瀉先生、国立大阪病院の長田、樫田、土山、中村先生、写真家の岩宮氏にかぎりない感謝をささげるしだいでございます。

昭和四十年九月

中村歌子

目次

まえがき……3

1 告白――わしは胃ガンや……11

〈1〉かあちゃん、覚悟せえよ

〈2〉やはりそうだったのか

〈3〉笑って死なせてくれ

2 出会い――仏さまに結ばれて……25

〈1〉美しい出会い

〈2〉永遠の三千代

〈3〉しあわせな日々

3 夢破る——応召から戦後へ……43
〈1〉愛する者よ
〈2〉カメラにこる
〈3〉わたしが寝たきりになる
4 決意——胃ガンの自分をモデルに……59
〈1〉病勢とみに進む
〈2〉手術を決意
〈3〉「笑顔の永眠」を残そう
5 手術——その前後の夫……71
〈1〉入院の前夜
〈2〉かすかな微笑

〈3〉小康のあとの急変
〈4〉遠慮せずシャッターを切れ

6 手記——ことここに至る……91
〈1〉いまはペンをとる力もなく
〈2〉母の教えに最期を生きる
〈3〉死は眠り・なにをか悩まん

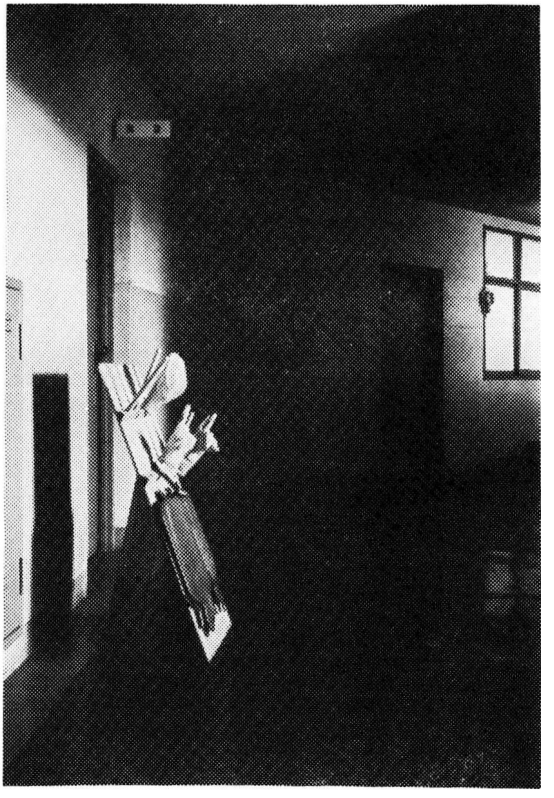
7 最期——にっこり笑って……105
〈1〉夜の病院へ
〈2〉不吉な予感
〈3〉去りがたいひととき
〈4〉永遠の別れ

8 孤独――「遺書」に見るその戦い……125
〈1〉秘めた苦悩の記録
〈2〉がんばりだ、がんばりだ
〈3〉母と子の対話
〈4〉新しいインキの跡
9 挽歌――夫よあなたはりっぱだった……141
〈1〉万人の胸を打つ遺作
〈2〉挽歌
10 死と対決の記録(写真)……153
撮影　岩宮武二・井上青竜・小畑正紀
11 中村正堯博士を偲ぶ……177
岩宮武二　土山雅俊　樫田平次　長田博之
久保秀雄　松本　弘　澤瀉久敬

装幀　林　忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

1　告白
――わしは胃ガンや



小児科病棟（撮影・中村正堯博士。以下各章の扉写真はいずれも博士撮影）

〈1〉　かあちゃん、覚悟せえよ

わしは胃ガンや

忘れもしない昭和四十年二月二日。

灰色のスモッグが大阪の町をすっぽりと包んで、時折り薄日がさすかと思うと、また小雪がちらつく、そら寒さでした。ひときわ早く日が暮れて、胸の病に伏すわたしの寝床の中まで、冷えこみが感じられる、そんな宵のこと。

床を敷いた二階へ、夫が運んでくれる夕食の膳に、いつものようにひとりではしをつけて、また布団の上へ。階下で、子どもたちと食事をすませた夫も、やおら二階へあがってきて、敷居をへだてたつぎの間に、ごろりと横になりました。しばらく並んでテレビをながめていたのですが、ふと、思い出したように、

「かあちゃん」

いかにもいい出しにくい口ぶりで、声をかけました。

「どうしたの」

じれったくなってたずねると、
「先月来のわしの胃の病気は、どうも胃ガンらしいぜ。かあちゃん、覚悟せえよ」
と、ボソリというのです。やぶから棒でした。顔は、と見ると、ことばに似合わず、ふだんと変わらぬ落ち着き払った表情。まじめな顔をして、また、人をかついだなと思うと、急におかしさがこみあげて、吹き出してしまいました。

わしは医者や、まちがいない

「とうちゃんの、いつもの胃ガンが、また始まったわ」
と、思わず口がすべったのでした。というのも、夫はむかしから、
「わしは胃ガンで死ぬ」
と、口ぐせのようにいっていたからなのです。
十五年前にも、胃ガンだ、と大騒ぎをしたことがありました。
「胃が重い」
「疲れる」
といっては、すぐごろりと横になるのでした。結核性肋膜炎と診断されて、入院しました。
と、ある日、急に吐きけを催して、洗面器にいっぱい吐いたあと、こんどは、みみずのような

虫を吐き出しました。
それ以来、胃ガンと騒いだ苦痛もサラリと消え、またふとってきました。
こんな印象が強く残っていたので、こんども、
「また、例の胃ガンぐらいやろな」
と、軽い気持ちでした。
ところが、この日ばかりは、いつもとはすこしわけがちがいました。わたしの軽率さをたしなめるように、いちだんと真剣な顔をつくって、
「わしは医者やから、からだのことはようわかる。胃ガンにまちがいない」
と、ダメを押すような口調。
「胃ガンならすぐ手術したら？　早いとこ手術したら、六〇パーセントぐらいはなおるというやないの」

覚悟はきまった、手術は受けん

勤務先の国立大阪病院で、夫がいつも兄のように尊敬していたのが、長田外科部長でした。わたしは、長田先生にみてもらうように、とすすめました。
夫の父は胃ガンで世を去りました。でも、その子どもがガンになるとはきまったものではな

いはずです。わたしは、夫がガンだとは信じたくありませんでした。
「ほんまにガンやったら、手術せな」
こう、せがむわたしに、夫はキッパリといいました。
「このままでいたら、あと、一、二年は生きて仕事できるやろう。だが、かりに手術して助かるとしても、そのあと、ブラブラとなにもせんでいるのはとても耐えられへん。だから、手術せえへん」
そして、こう続けるのでした。
「わしは覚悟をきめた。きみも、覚悟せんならんぞ」

〈2〉 やはりそうだったのか

痛いほど思い当たるふしぶし

夫が、自分でいうようにほんとうに胃ガンだったら……。もし、このままほうっておいて、万一のことがあったら、自分として、どんなに心残りなことでしょう。わたしの気持ちとして胃ガンの夫を、いずれ死ぬにしても、手術しないで死なすことはできません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong